

来訪者紹介

—先祖の地を尋ねて—

佐藤 巧

(会員 佐伯市池船町)

①旧佐伯藩士佐久間氏と

矢野龍溪の子孫来る

令和元年六月十九日、東京より佐久間精一氏と松下真美様が歴史資料館に来訪された。

佐久間氏の元祖は佐伯藩三代高尚の代に仕え、九代高誠と十一代高泰のとき家老職を勤めた家柄で、明治以降に南海郡郡書記官となった佐久間仲氏は、同十九年には鶴望村外二村の戸長を勤め、その後東京へ転居したよう
で同二十四年には赤坂小学校の新築に金壹円の寄附をして東京府知事の感謝状を受け取っている。今回、子孫の佐久間精一氏は先祖伝来の貴重な系図や古文書類等、目録を作成して佐伯市に御寄贈下された。

また同行された松下真美様は龍溪矢野文雄の曾孫で佐



佐久間精一氏



佐久間仲氏への戸長任命状

久間家とは親戚に当たる。前回御来訪の節、松下様より「矢野家の墓地在白坪に残っているらしい」と聞いて早速、小野ノ丘墓地に見当を付けて踏み入ると、すぐに新しい矢野家の墓に行き当たり、一段下の藪の中に古い墓石群が見つかった。分け入ってみると「黙齋居士」の墓碑銘が見え、正しく矢野龍溪の曾祖父の墓であった。隣りにある墓には「鶴野氏」とあり黙齋の妻君であろう。十二基中最も古い年号は元禄十三年（一七〇〇）である。

『藩政時代の教育（大分県）』によると、「八代藩主高標は学事を拡張し安永六年（一七七七）五月に藩校四教堂を新築、矢野黙齋・山本七兵衛を教育に従事させ、学則など次第に具備す。二人の没後、筑後久留米藩の松下築陰を招き儒官とす」とあるから、黙齋先生は妻に先立たれ、その後十四年ほど教授を勤めたことになる。また妻君鶴野氏は代後浦の財閥であった網元鶴野氏であろうか。大阪住吉大社の境内に佐伯四二浦の代表として一対の石燈籠が献納されている。

【矢野黙齋先生の墓碑銘】

得誠院 黙齋居士



佐伯市職員武田氏・甲斐氏と松下様母娘

翁の名は寛、字は公栖、黙齋と号す。元文元年（一七三八）十一歳で初めて仕え、天明二年（一七八二）致仕（官を辞職）すも、再び命ぜられ藩教授となる。二男四女を生む。男は済美、女は物・有・叔・恵と名づく。

寛政三年（一七九一）六月十六日隠居の地に卒す。年齢は六十六歳。城北の小野に葬った。翁は美仲先生に就いて江戸に学び、人なりは沈黙して敏なり。博学で謙なり。公家の利知を興し、教えられぬ人をいとわず。それ老吏（老

いた役人)の純忠なるものが。

銘にいわく

墓地に興あり また何人を用ふ。

公事に心を尽くし あゝ臣の臣たり。

このとき寛政八年(一七九六) 六月十六日

臨済宗妙心寺派養賢寺の前住職・隠居して宝林庵に寓す。珠月山と号し七十三歳の老人、拙くも誌す。

【矢野黙齋先生妻の墓碑銘】

鶴野氏貞室自享墓

亡き妻は鶴野氏、諱は道。天保十九年(一七三九)十二月廿五日に生まれる。宝暦四年(一七五四)歳二十一で予に嫁ぐ。人なりは柔順にして貞愨(正しくまじめ)言語少なしを喜ぶ。温かく色を形にせず、善く家事を幹り女紅(女の仕事)に精しい。

男子は二人弘と謙、女子は四人順・慎・政・説を生む。政は早天して一朝たちまちに疾を得、すでに革つて困劇(はげしく苦しむ)。言語安静にして体容は常のごとくすなわち語る。予はいわく寿は天命なりと。安永三年(一七七四)四月廿九日なり。享年四十一才。就いては城北の小野ノ丘

の先墓に葬る。諡は貞室自享という。

あゝ予は夙に先考(父)を喪い、特に母子および幼弱なる弟妹数人と群居同室す。亡き妻善順は姑に事え叔母・妹・親戚に睦まじく、華色を好まず貧家に拮据(せわしく働く)の勞、奴婢と夜寝に興じ孳々(つとめはげむ)して倦まず。紆を織り紡績き緇縫せ汚れを澣いもつて衣服とす。長幼の功は倍して函葬(おろそかに)せず。

予は恒に公署に在り、冗劇(わすらわしさ)は夜を昼に継ぎ、これに加えて役に従い東都に数なり。然るに予をして未だかつて家を顧みる憂いあらざることを蓋し二十年、旻天(そら)の下に吊る。未だ中寿にして宛も逝きたり。

あゝ老婆は堂に在りて色養(親孝行)に事え終わらず。諸氏はなお幼弱にして鞠育(養育)を遂げず。悲しきかな。それ襄ることを竣る。なお哀憾に堪えず。その夫矢野寛公栖その大略をすなわちその墓の銘として曰く

蔵すなく否むなく、三従(親・夫・子に従う)に道は存す。姑 あり叔あり、柔順これ尊し。

閨徳(婦女子の守るべき徳)を愆たず、宜しき室に家和むべし。命の短折、あゝ天は如何せん。

孝子謙が謹んで書く



佐久間家と矢野家の集合写真



白坪地区小野ノ丘に残る矢野家の墓地

②平戸藩士泥谷氏のルーツを尋ねて

佐世保史談会長中島真澄氏から電話を頂いたのは平成二十九年の一月であつたと思う。「佐世保市藍浦町に泥谷姓の墓地があるので何者だろうかと調べたところ、大分県佐伯市に泥谷の地名があることがわかったので、泥谷氏について何か心当たりはないでしょうか？」との問い合わせであつた。

確かに泥谷をひじやと読むこと自体むずかしい地名だが、それだけに泥谷姓といえは佐伯出身者と考へて間違いないようである。高鍋藩の家老職泥谷家の『大神姓泥谷氏系図』によると、その出自は五代佐伯政直の弟、堅田八郎惟助の次男が泥谷次郎惟直と名乗り、以降は直政・直信・直治と直の字を通字としている。



【高鍋藩泥谷氏系図より抜粋・現代語訳】

わが先祖は大神姓、かつて豊後国泥谷の里に住み、佐伯殿と同姓なり。佐伯殿の息女が筑前の秋月君に嫁ぐ、よつてここに土五人を挙げてこれに従わしむ。いわゆる泥谷氏・阿南氏・汐月氏・野中氏・山口氏なり。なかんづく泥谷氏を家老となすは、これすなわち秋月家臣の由緒たるなり。往昔、乱世のとき旧記を失墜してその年代は詳らかに知り得るべからず。弘治年中以来の事跡を昭らかに著すなり。然るにすなわち泥谷直保が中興をなすものなり。



佐伯史談会と同じ 60 周年の記念号

※佐伯氏から筑前秋月氏に嫁いだ時代については、「佐伯氏系図」にも記載が無く今のところ不明である。

弘治三年（一五五七）秋月氏の古所山城は大友氏の攻略によって落城、城主種方は逆臣によって害され、嫡子種実は主従四人で防州に逃れ、泥谷出羽直保・同刑部直貞も後を追って主従七人となった。三年後、離散した秋月の家臣団が集結し奇策をもって古所山城を取り返し、種実公を山口から本国へ迎えたという。

泥谷刑部法名宗有 直貞（なおさだ）

天正十五年（一五八七）秋月種長公は日州高鍋および諸縣福岡などを拝領す。豊前今津より乗船して九月三日に高鍋に着きたまふなり。直貞父子従い来たり居住す。直貞が隠居の後に種実公の息女が肥前藍浦の松浦丹後守殿へ嫁ぐ。種実は直貞を隠居より起こして従い行かしむ。直貞は向かうに、すでに家督を嫡子直根（なおもと）に付しおわる。越えて妻および季子（すえっ子）孫兵衛を率いて共に行き、ついに肥前の住人となる。

◆大分県佐伯市に泥谷の里を訪ねる

※談林六〇号抜粋 佐世保史談会会長 中島眞澄
平成最後の四月二九日・三〇日の両日、かねてから行きたい思っていた大分県佐伯市の「泥谷の里」に行く機会を得た。

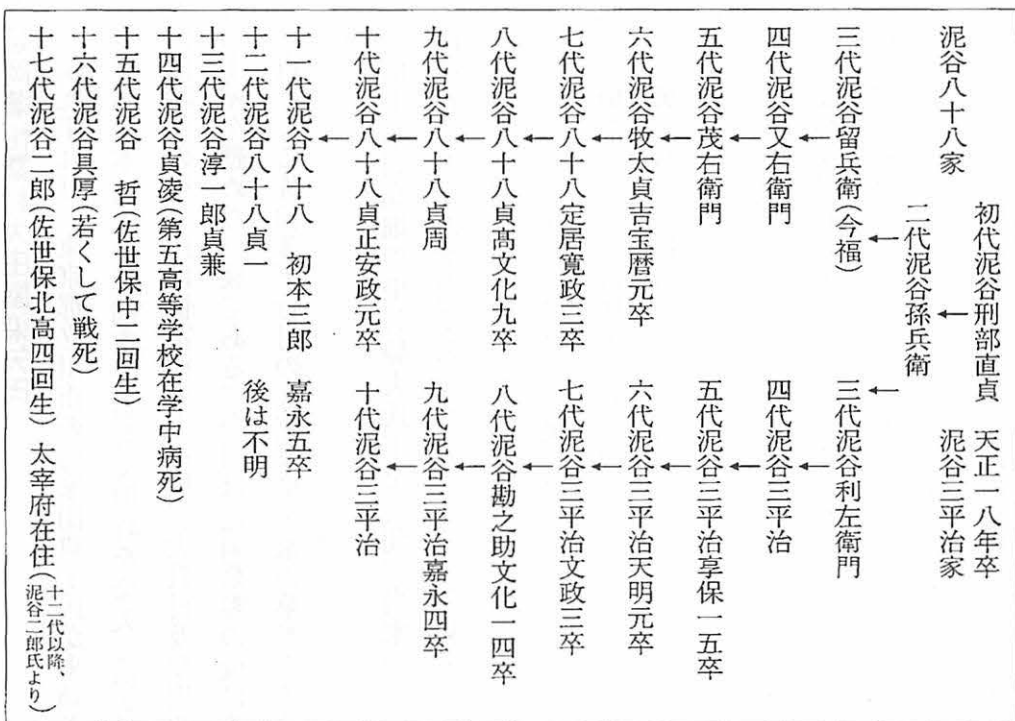
生憎の雨天の中、佐伯史談会にご案内をお願いしたが、大きな収穫を得ることになった。

二九日午後一時頃、佐藤会長と合流し今回の計画について説明した。今回の旅で参考になったのは佐藤会長のお話と佐伯市歴史資料館、佐伯領木立村旧大庄屋泥谷家の墓地を見学できたことであった。

この地で泥谷家は大庄屋として活動していたのだ。旧松寿寺跡に泥谷家墓所・寺屋敷として残っていた。付近には多くの石塔や六地藏も並んでいる。付近の一族の墓所を一カ所に集約したのであろう。古くは元禄一〇年から明治三六年まで全部で三六基が整然と並び、一二代の泥谷齢通まで祀られていた。一族が皆集約されており、平戸や佐世保と異なる家系が存在していたのだ。

きつと泥谷氏は周辺の農家を束ねる重要な役割を持っていたのだらう。近くに「堅田村泥谷の里」があった。

平戸藩泥谷家の系譜 (佐世保史談会誌第六十号より)



平戸や佐世保の泥谷氏とは全く別の人々がこの地でも暮らしていたのだ。戦国の昔、秋月種実の家臣として仕え、嫁いだ娘の付人として宗家松浦の本拠地相神浦や松浦市今福、さらに平戸家臣として、また高鍋付近で生きてきた泥谷一族をさらに調べて見たいと思うのである。

藤堂高虎の武將

佐伯權之助惟定家士馬上
(元和元年四千五百石)

高島理兵衛 (二百五十石)

泥谷仁左衛門 (百五十石)

高畑太兵衛 (百三十石)

佐伯六左衛門 (百石)

佐伯久左衛門 (百石)

高畑勘左衛門 (百石)

寺島正兵衛 (百石)

高畑主税 (百石)

長田三郎兵衛 (百石)

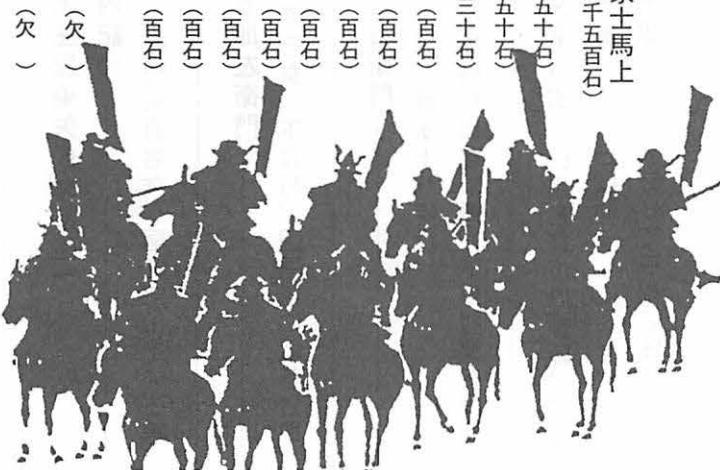
泥谷諸右衛門 (百石)

奈須理右衛門 (百石)

衛藤伝左衛門 (百石)

杉谷十左衛門 (欠)

衛藤惣左衛門 (欠)



大友氏豊後改易後、佐伯氏は藤堂高虎に仕え伊豫に渡る

③延岡藩恒富村大庄屋染矢氏

令和元年九月、東京都立川市の弓家田典子氏が来訪された。母の本籍地が延岡市愛宕町で旧姓を染矢という。延岡藩時代の染矢氏は恒富村の大庄屋、大貫村及び出北村の庄屋を勤めた一族である。今回は延岡墓参の後にその出自となる佐伯藩下野村の大庄屋染矢家の墓参も希望されていた。

佐伯市鶴岡高畑の染矢静夫氏宅を訪問、当家の系図を拝見して夫妻の案内で墓所へ向かい、三〇基を越える墓石群を一巡した。元祖とする染矢内記は大永七年（一五二七）の梅牟礼合戦に落城し、十一月二十五日、城主佐伯惟治と共に日州尾高知山の合戦に果てた。内記の墓は御影石の五輪塔で江戸中期に建立されたと思われる。

近年の集中豪雨で参道の側面が崩落して改修工事が終わったばかり、静夫氏は墓地の管理も大変なので墓石を整理して寄せ墓にしたい意向を洩らされておられた。

弓家田氏の話では、延岡の染矢氏は恒富町の願成寺が菩提寺で墓所も境内にあったが、区画整理によって現在は岡富公園墓地に移転しており、その写真も持参されて

【佐伯下野村大庄屋染矢氏略系図】

時忠 染矢内記

母は野々下左衛門尉直治女。尾高知山主従生害。

時英 染矢五郎左衛門

妻は深田伯耆守女。木立村、因尾村に敵首分取。

時儼 染矢治右衛門

実は時英の末子、寛永十八年没。

毛利高政より鉄砲秘伝書頂戴、下野村長を拝命。

時知 染矢平治郎 日州名貫川に参陣、帰国す。

時一 新十郎 右同断

時直 孫十郎 故ありて日州に住す。

いた。私はこれまで延岡の染矢氏について系図や由来を記した碑文など見たこともなかったので、住宅地図でその場所を確認して、後日一人で現地を訪れた。

「並び矢筈」の家紋をあしらった納骨台の上には、中央に染矢家累代之墓。右手に歴代墓碑銘（宝暦十年に江戸初期から中期にかけての七代夫妻の戒名を刻む）、左

に何故か一人だけ女性「櫻讚妙秀信女」（享保四年歿の墓が残されている。また納骨台の脇には「墓地移転の記」が掲げられているので、平易な現代文にして紹介しよう。

【染矢家由緒ならびに墓地移転の記】

源頼朝が天下を治め四海太平なり。建久四年（一一九三）五月中旬、富士の巻狩あり、諸国の兵士ことごとく集まる。ここに武田丹波の前司、藤原朝臣貞高の嫡子太郎は右大将



染矢静夫夫妻と弓家田さん（佐伯市高畑）



染矢家累代之墓（延岡市岡富公園墓地）

に供奉し、御狩の先陣をかたじけのうす。狩場において太郎の射たる矢は先ず鹿に当たり、弓矢は鮮血に染まる。御感深く栄誉のため一郡を賜り、あわせて染矢修理大夫藤原の貞助と改名の教書をいただく。染矢氏の始祖なり。

後年、源（大友）能直が九州に下向するや、これに従いて豊後国大野郡三重里に來たり逗留す。天正六年（一五七八）大友宗麟の延岡攻略に従い來たり恒富村に居住す。以来、高橋・有馬・三浦・牧野・内藤の各藩主に仕え、

享保四年（一七二二）以降、恒富村大庄屋を勤む。

昭和に至り信一と信は医を業とし共に医学博士の学位を授かる。始祖以来、染矢家墓地は願成寺に構え居りたるも墓数八十基を数えるに至り、あまつさえ墓地の狭隘きようあいを來たし無縁墓を生じ、慰靈を怠るの感あり。昭和三十八年、願成寺墓地整理が行わるに当たり、旧墓石二基を公園墓地に移し、あわせて染矢家累代の墓を建立す。

昭和三十八年十二月

染矢信一／染矢 信

延岡の染矢家には江戸以前の系譜は伝わっておらず、墓地移転を機会に佐伯染矢家との交流が始まり、この由緒書きが完成したのであろう。

天正六年（一五七八）三月、大友宗麟は延岡の土持氏を討伐し、その戦後処理のため佐伯宗天（惟教）を延岡に留め置いた。家臣の染矢氏は民政を任せられ奔走したのであろうが、同年十一月に日州高城まで進軍した大友軍は島津軍と対峙して大敗を喫した。この戦いで佐伯惟教父子三人をはじめ一二〇余名が戦死、染矢新十郎や平次郎の名もあり、陣山に残された人数の中には染矢孫十郎の名もある。系図とは多少解釈が異なっているようだ。

しかし島津軍が九州を席捲していた天正十五年まで、延岡の染矢氏は武器を捨てて野に下っていたのであろうか。あるいは秀吉の九州統一によって高橋氏が入封したときに再び頭角を表したのであろうか。佐伯氏の遺臣としては岡富村の大庄屋となった山口氏も存在する。

